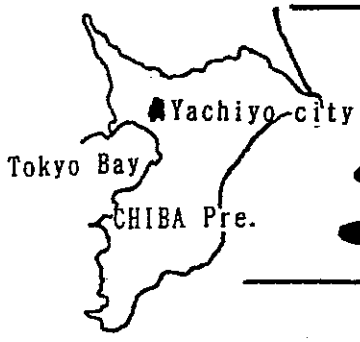


まい 埋もれ

No. 10

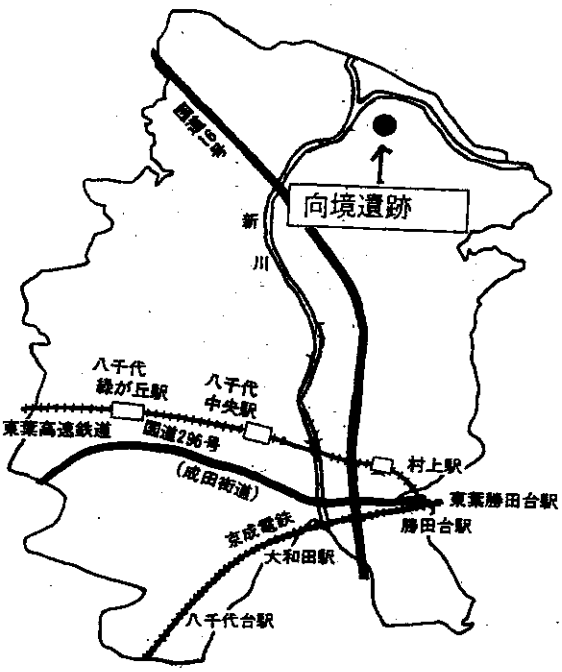
千葉県八千代市
埋蔵文化財通信
2006, 7, 15
（平成18年）

向境（むかいさかい）遺跡特集

今回は、前回の栗谷遺跡に引き続き、八千代市保品の八千代カルチャータウンの開発事業に関連して行われた埋蔵文化財調査の一つである向境遺跡を紹介したいと思います。

【向境遺跡の位置】　向境遺跡は、前回の栗谷遺跡同様、八千代市北東部の保品地区に所在し、遺跡北側に新川を望む、台地の縁辺部から平坦部に位置しています。谷津を挟んだ対岸の台地に栗谷遺跡が、同じ台地の北側に境堀遺跡が隣接する位置関係にあります（次ページ図面参照）。発掘調査前は山林でしたが、現在は住宅地となり、栗谷遺跡同様、景色が一変しています。

【遺跡の概要】　向境遺跡は、縄文時代～近世に至るまで実に様々な時代の遺跡で、このような遺跡のことを複合遺跡と呼んでいます。向境遺跡の範囲内には、近世の塚や土塁（どるい）が調査され近世に至るまで、人々の暮らしの営みを窺い知ることができます。また、隣接する境堀遺跡も全く別の独立した遺跡ではなく、それぞれが関連しあって、時間的、空間的に連続した遺跡であることが判ってきました。



特徴的な事柄を２、３あげるとすると先ず、縄文時代の撚糸文系土器が多量に出土したことです。撚糸文土器とは、縄文時代早期（約9000年前）の土器で、八千代市内で見つかっている縄文土器の中でもかなり古い時代の土器になります。撚糸文とは、棒状のものに縄を巻きつけコイルのようにし、それを転がして模様をつけます。出来上がった模様は、「雨だれ」のような模様となります。向境遺跡で見つかった撚糸文系土器は、詳しくは、「花輪台式」土器と呼ばれ、「雨だれ」模様の他に鳥の羽のような模様をつ

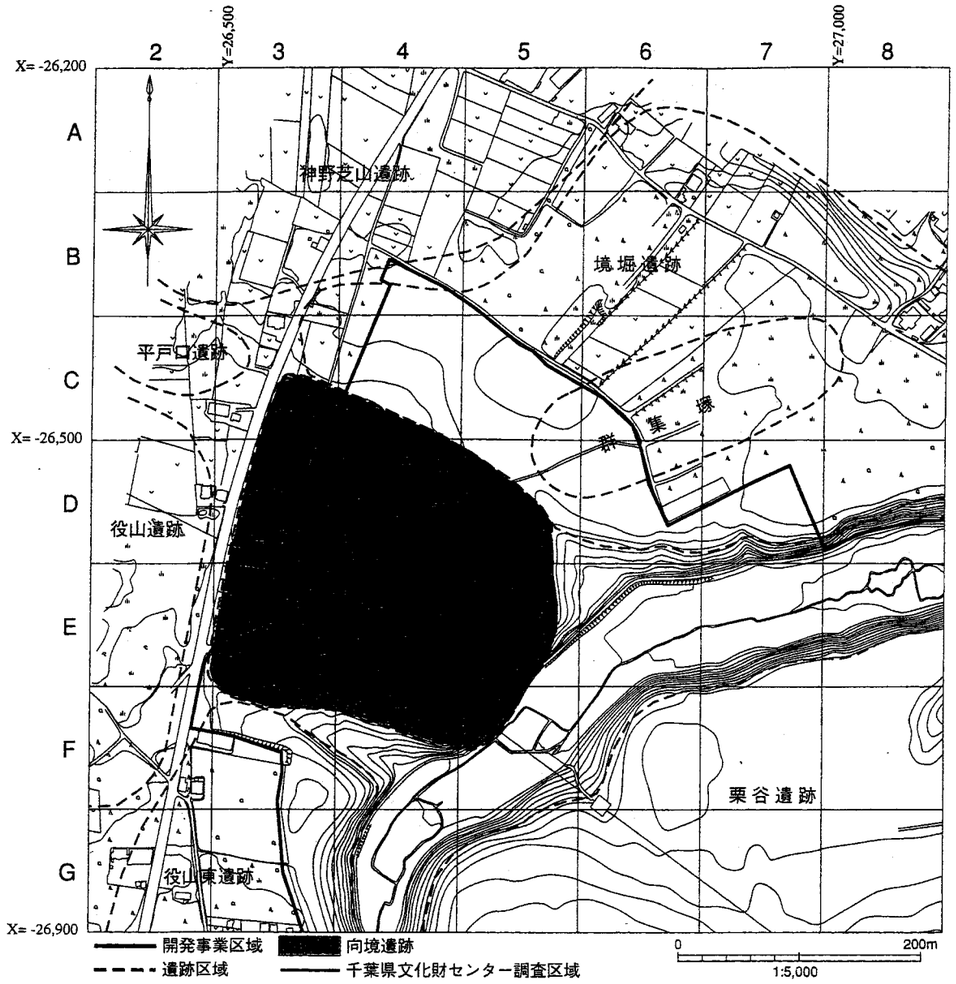
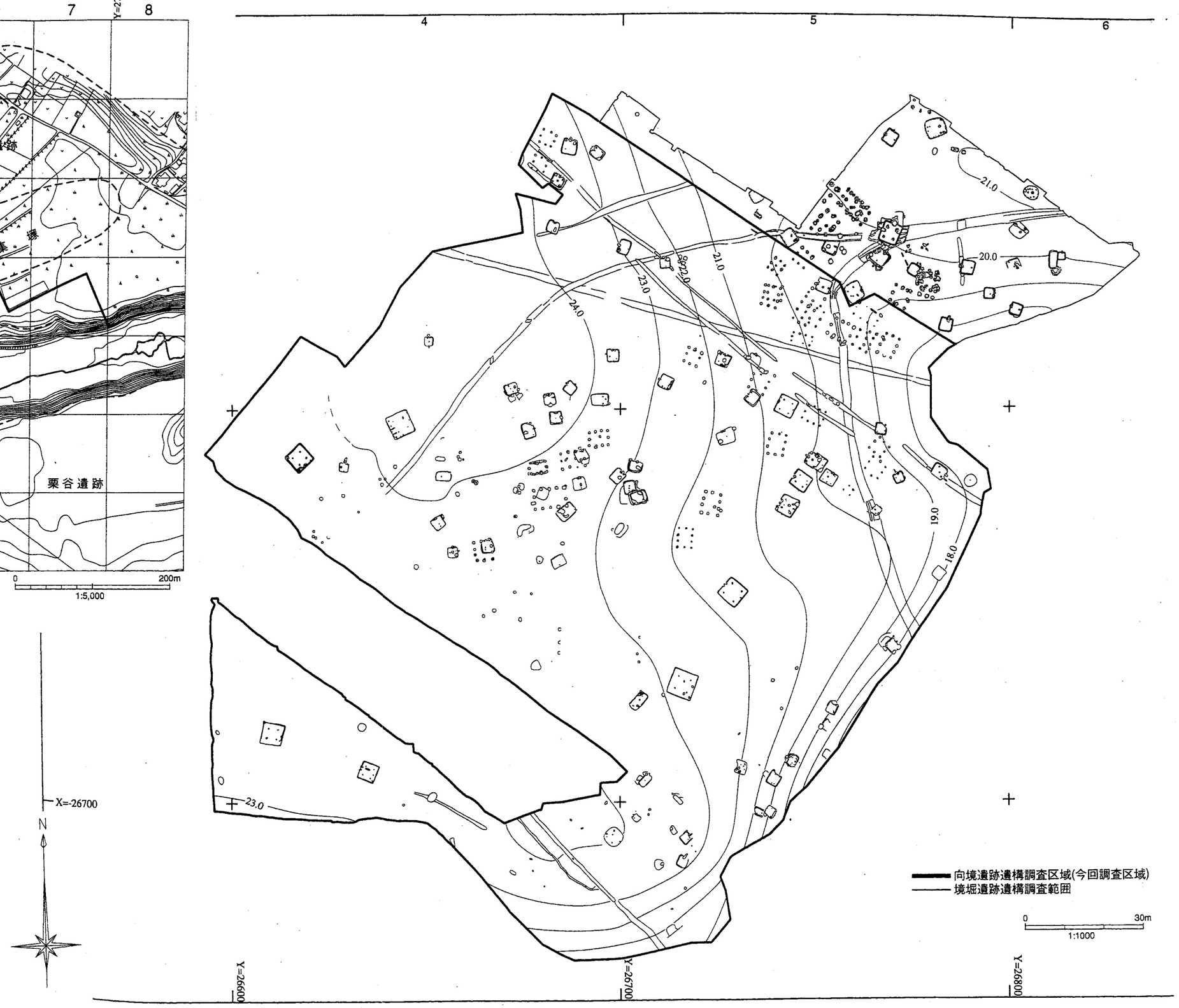


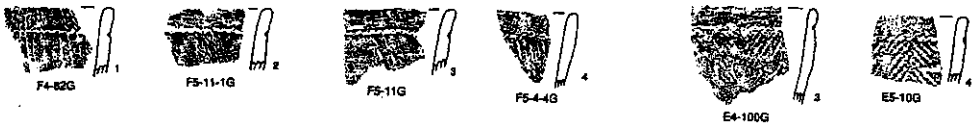
図1-2-1 向境遺跡周辺地形図

遺構の概要

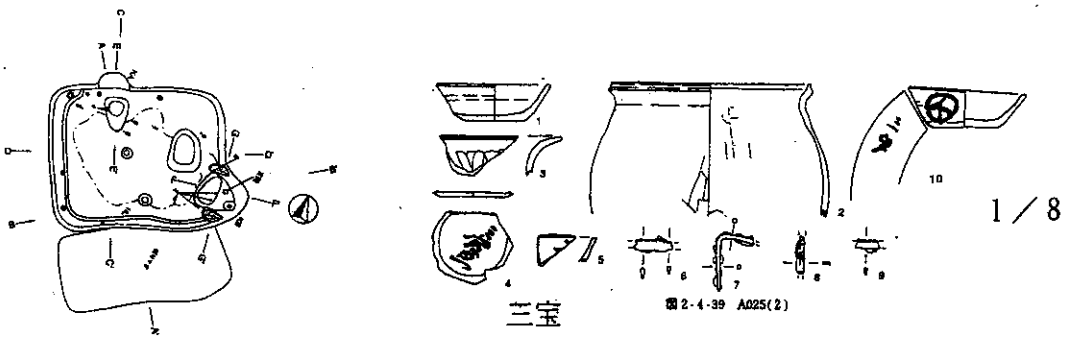
縄文時代	炉穴	11	基
	その他の遺構	9	基
	遺物包含層	1	ヵ所
弥生時代	竪穴住居跡	1	軒
古墳時代	竪穴住居跡	6	軒
	土　坑	1	基
奈良・平安時代	竪穴住居跡	62	軒
	掘立建物跡	27	棟
	土坑	14	基
	その他の遺構	1	基

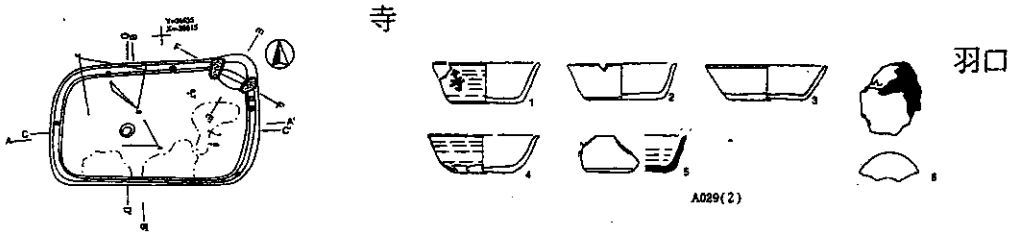


向境遺跡遺構配置図



縄文時代早期　撚糸文土器（花輪台式）　1／6





奈良・平安時代　竪穴住居跡 1／160

けたりします。また、土器の口の下に縄を押し当てて、胴の模様を区画することも特徴としてあげることが出来ます。

次に、奈良・平安時代ですが、竪穴住居跡が62軒発掘されました。通常、この時代の竪穴住居跡は、壁のほぼ中央にカマドが作られていることが多いのですが向境遺跡では、住居跡の角にカマドを作る珍しい例が何軒か見つかりました。そそて、角にカマドを持つ住居跡から、「寺」・「三宝（さんぽう）」など仏教的な文字が書かれている土器＝墨書土器（ぼくしょどき）が共通して多く出土しました。墨書土器を出土する住居跡は、他にも発掘されたのですが、角にカマドを持つ住居に限って仏教的な文字の墨書土器が出土するあたりが興味をひきます。更には、鞴（ふいご）の羽口（はぐち）鉄滓（てっさい）といった鍛冶（かじ）作業に使われる遺物が出土しています。これらの事柄から向境遺跡の一角に普通の農村集落とは違う特殊な集落か、施設があったことが見えてきました。

向境遺跡は、以上のように、縄文時代や奈良・平安時代で様々な特徴を示してくれます。また、このこと以外でも、様々な成果を挙げています。

（宮澤）

埋（まい）やちよ　N0.10
－千葉県八千代市埋蔵文化財通信－
平成18年7月15日発行
編集・発行　八千代市教育委員会
社会教育課　文化財保護班
八千代市大和田138－2
〒276-0045☎047(481)0304

－編集後記－
次回は、向境遺跡の隣に展開する境堀（さかいほり）遺跡について書きたいと思います。